

IV-51

日本の都市の核心(コア)の構造に関する景観工学的研究

岩手大学 正会員○赤谷 隆一
岩手大学 正会員 安藤 昭

1. はじめに

ヨーロッパの都市は広場を核心(コア)として整然と構成されているのに対し、日本の都市には核心がなく、無秩序な市街地をなしているといわれる。しかし、本当にそうなのであろうか。本研究は、日本の都市の核心は何か、そしてその構造はどのようなになっているのかを明らかにすることを目的としている。

2. 都市における核心的景観の分析モデル

ここでは、都市における核心的景観の構造について次のような視点、すなわち人間集団(評価主体)と都市(景観対象)との間の視知覚的な関係性としてとらえ、人間集団(コミュニティ—プライバシー)と都市の視知覚的環境(空間—景観)の2つの尺度を交差させると、都市における核心的景観の構造を描きだすことができる。(図-1)¹⁾

さて図-1に示されるところのインフラ機能空間、心理現象としての景観、文化現象としての景観、そして生物的環境の4つのタイプの都市の空間・景観が美的形式原理にもとづいたひとつの眺めとして、つまり文化現象としての景観を芯にバランスよく形式的に統一された眺め(scene)として与えられると、空間・景観のありように豊かで確かな意味の脈絡が生じ、景観の深さと密度を高める。この景観のうち、評価がもっとも高い景観(都市のなかの第一位の評価の景観)を都市の核心的景観と呼ぶものとする。核心的景観には、上述の視点固定的なシーン景観の他に視点非固定の広場や動視点の街路も含まれる。

しかし、眺望や広場景観に比べ、シークエンス景観である街路景観は都市の核心になりにくいと考えられる。

3. 調査地域および調査の方法

調査地域は、東北・北海道地方の個性豊かな7都市(表-1)である。調査方法は現地踏査および郵送によって各都市計画課に都市の核心をなすと考えられる眺望・街路・広場を選定してもらうという方法で行なった。このうち函館山からの市街地の眺望(函館市)、飯盛山からの若松城址および市街地の眺望(会津若松市)、武家屋敷通り(角館町)、元町公園(函館市)をとりあげ、分析すると次のようになる。

4. 検証分析

4-1 シーン(scene)景観の実例の分析

a) 函館山からの市街地の眺望

函館市は、渡島半島南端に位置した人口31万人の南北海道の中核都市で、函館山は西部地区に位置する山である。函館山からの景色は生物的環境(函館山、函館港、大森浜、駒ヶ岳連山)で囲まれた市街地(機能空間)、街並みの中のある五稜郭や点在する歴史的建造物(文化現象としての景観)で構成されている。函館山から市

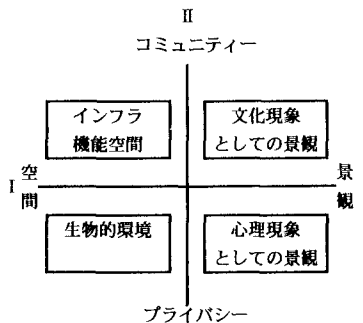


図-1 都市の核心的景観の分析モデル

表-2 各都市の都市計画課から寄せられた景観

都市名	場所
函館市	①函館山→市街地
	②函館港→函館山一帯
	③五稜郭タワー→市街地
弘前市	①弘前公園→岩木山
	②市街地→巖勝院五重塔
遠野市	①鶴倉城址→市街地
平泉町	①高館→北上川・市街地
望仙台市	①仙合城址→市街地
	②太白山→市街地
	③都市部→青葉山
会津若松市	①飯盛山→市街地
	②青あぶり山→市街地
街路	①厩方丘通り
	②大三坂通り
	③八幡坂通り
	④基坂通り
	⑤行啓通り
弘前市	①弘前公園外周道路
遠野市	②大工町通り
角館町	③武家屋敷通り
仙台市	①青葉通り
	②定禅寺通り
	③東一番丁通り
会津若松市	①かきがたの道路
広場	①元町公園
	①市民センター前
遠野市	②遠野駅前
平泉町	①無量光院跡
仙台市	①勾当台公園
会津若松市	①若松城本丸

街地まではかなり落ち込み俯角の大きい領域が開放される。港と市街をかかえこんだこの眺望が“100万ドルの夜景”と呼ばれる日本の代表的な風景にさせたものと思われる。

函館山（視距100～600m：近景領域）、駒ヶ岳連山（視距30km～：遠景領域）、函館港・大森浜（視距1.2～4.5km：中景・遠景領域）、市街地（視距1～10km：中景・遠景領域）、五稜郭（視距5.8km：遠景領域）、点在する歴史的建造物（視距800m～1.6km：中景領域）

b) 飯盛山からの若松城址（鶴ヶ城）・市街の眺望

会津若松市は会津盆地東端部に位置し、市全体の70%が山に囲まれた人口28万人の会津地方の拠点都市である。飯盛山は市東部にあり、市街地を一望できる。ここからの眺めは生物的環境・文化現象としての景観の飯盛山の樹々を前景に街並み（機能空間）が若松城（文化現象としての景観）を中心として統一されている。飯盛山からの眺めは角度を変えてみた明治維新の歴史の姿があり、おのずと新たな感動があふれてくる。

飯盛山（視距100～500m：近景領域）、市街地（視距100m～4.5km：近景・遠景領域）、若松城（視距2.8km：中景領域）

4-2 街路の実例の分析

a) 武家屋敷通り

武家屋敷通りは表町上丁から東勝楽丁までをさし、武家屋敷（文化現象としての景観）の老木（生物的環境）と旧藩時代の環境を残した街並み（機能空間）の調和が人々を安らぎの中に引き込む。

街路延長 $L \approx 810\text{m}$ 、街路幅員 11m 、歩道幅員 $D_s \approx 1.5\text{m}$ 、沿道の建物の高さ $H \approx 3 \sim 6\text{m}$ （1～2階）の街路であるので、街路幅員延長比 $D/L \approx 1/74$ 、歩道幅員比 $D_s/D \approx 1/7$ 、街路幅員建物高比 $D/H \approx 1.8 \sim 2.9$ のプロポーシオンからなる街路である。

4-3 広場の実例の分析

a) 元町公園

元町公園は函館市を代表する公園で、広場のまわりの旧函館公会堂、旧イギリス領事館（文化現象としての景観）や基坂を通して見える市街地（機能空間）、函館山や函館港（生物的環境）によって独特の異国情緒を生みだしているといえる。しかし函館山からの市街地の眺望が函館市のなかでもっとも評価の高い景観（都市のなかの第一位の評価の景観）であるためこの広場は単なる広場に位置しているといえる。

奥行 $L' \approx 120\text{m} \sim 129\text{m}$ 、幅員 $D' \approx 75 \sim 87.5\text{m}$ 、広場のまわりの建物の高さ $H \approx 6\text{m} \sim 17.2\text{m}$ （2階～旧函館公会堂）であるから、広場奥行建物高比 $L'/H \approx 6.98 \sim 21.46$ 、広場幅員建物高比 $D'/H \approx 4.36 \sim 14.58$ の心地よい圍繞感のある広場景観をなしている。

4. むすび

都市計画課からの回答では眺望14、街路12、広場5が寄せられたが、分析の結果、都市の核心をなす景観は眺望6、街路1、広場0となり眺望景観が全体の85.7%を占めた。これより日本における都市の核心は眺望景観によって形成されているといえる。日本においては眺望が都市の核心をなすため、ヨーロッパの都市にみられるごとく広場が都市の核心として成長しなかったといえよう。

5. あとがき

都市の人間化の大切さが叫ばれるようになって久しい。この間、多彩な研究と提案がなされてきたが、カミロ・ジッテのその著「都市をつくる術」を祖とする多くは空間論的提案であった。これに対し本研究は都市の核心（コア）ともなるべき景観を定義し、この景観の意味と形態を浮き彫りにすることを目的とする意味論的研究である。

[参考文献]

- 1) 安藤昭；都市景観計画，第四版土木工学ハンドブック I 土木学会編，技報堂出版，pp. 841～845，平成元年11月
- 2) 安藤昭、赤谷隆一、長谷川順一；都市における核心（コア）の構造に関する景観工学的研究，土木学会東北支部技術研究発表会講演概要，pp. 426～427，平成4年3月